

という現象は、これはいったいどういうことなのか、やはり、教育の問題、その他の原因が考えられる興味のあるところであります。

また、拝む理由については、拝む人自身がはっきりしてない。一番多い理由をあげたのは、先祖への挨拶、次に何となく習慣だから、次に先祖への感謝・供養、中には拝まないとはよくないことが起るから、などという理由もあります。以上が仏壇の礼拝ですが、神棚ですと、習慣だからという理由が一番多い、このように、先祖への挨拶、習慣だからという拝む理由から、信仰のあり方、宗教行動ということがある意識されてない、というよりむしろ日本的な意識行動の中に、日蓮宗などのような挨拶の意義があるのか、浄土宗ならどのような挨拶の意味があるのかといった意識がはっきりしないといったところが、われわれ教化をしてゆく側として一つの問題があるのではないか、これは農村に限らず一般的な事柄かもしれませぬ。

それから、第三の寺、僧侶に対してどのような考えをもっているのかという間は、非常に難しく、こちらで必要か否かのどちらかを選んでもらう方式を採りました。

寺が必要と答えたものは、十代で42%、二十代で85%でほとんど寺の存在を肯定しているが、その内容は、供養の為に33%、葬式の為に19%、そして心のよりどころというものが僅か9%、多くは供養・葬式の為に必要という要求

がうかがわれるわけでございます。

僧侶の方も必要と答えたものは、十代で51%、二十代で80%以上となっておりますが、どう必要かという答えになりますと、葬式をするなど儀式を行う場合に必要とするのが大部分の答えで失望させられたのであります。困ったときに相談する人、指導してもらえ人という意識がないということ、農村の中で坊さんというのがどのように受けとめられているかというのが疑問になったところであります。

今回の調査で感じたことは、農村の青年も意外にマスコミで一般化されてき、都市の青年と大へんに似たような傾向があるということがわかりました。

時間の都合で十分な説明ができませんでしたが、後の質問の時間で不足の点を埋めたいと思います。

現代と信仰実践

渡辺 宝陽

浅学非才な私に大へん重要な問題を問題提起しろということでございますが、私なりに考えたものを発表させていただきます。只今、新聞智照師・木名瀬寛明師の非常に具体的な問題を示されて、その中でいろいろ問題が考えられる

わけでございます。その意味では私も東京北部の足立区の一住職として何らかの実践しているわけで、これから申しますことも、自分はこういうふう願っているということでございます。

先ず、ここで申し上げたいことは、教学というものを教団の中核として考えてゆかなければならない。教学と教団と布教の三は、お互いに三角の緊張関係にあって、そのいづれをも信仰がつかないでいるということを考えておかなければなりません。

布教というものは、教学と教団の理念と深いかわりを持つている。教学というものは、教団における具現化、布教の第一線における実体化というものを持たなければならぬ、ということとは信仰の実践化、或は具現化といったものは、教団・教学・布教の三者の協同作業の上に実を結ぶものである。

しかしそれは、お互いに緊張関係の上にすすめられてゆくのでなければならぬ、と考えるのであります。

一昨年、昨年の第一、第二の教化研究会議に参集された方々の共有している問題というものは、おそらく純粹信仰というものはどのようにして実践してゆくべきか、或は、どのように実践できるのか、という共通の悩みがあるのではないかというふうに推察するわけでございます。

いわば日蓮宗の行信・信仰の実践に心を砕きながらも、

教団の枠とか、寺院の持つさまざまな悩み、教団組織の制約を超えてどのように信仰し実践してゆくかということに取り組んでおられると思います。

実は教師の悩みは教団の悩みであると共に教学的な悩みでもあります。このような問題を相関関係において克服してゆかなければならないと考えるわけであります。

現代と信仰実践というテーマを与えられたのであります。が、どういふふう理解すればよいか、一について深く洞察するならば、さまざまな問題があるであらうでしょうが、一応次のように簡単に考えてゆきたいと思うのであります。

現代の問題とは何であるかといえ、最近の諸方面で切実な問題になってきている人間自身が利益のために生み出したところの文化・政治その他のことが逆に人間自身を苦しめている状況を生み出していることが実感として考えられるのであります。現在はおかつてのように自然からの恐怖というよりも、人間自身が作り出したさまざまな矛盾があらわれてくる時代である。これこそ法華経に示されるところの五濁悪世の時代であると切実に感ぜられるのではないかと思います。

次に信仰というものは、ここでいう信仰とはわれわれの信仰する法華経の救いというものに生きることであり、その法華経というものは三世諸仏説法の儀式として久遠実成

の釈迦牟尼仏がお説きになり、そして多宝如来が本願の故に証明され、十方分身諸仏が讃嘆したところの、いわゆる仏法中の仏法であります。日蓮聖人がわれわれに開導された大法の信仰に生きること、それがいうまでもなくわれわれに与えられた信仰に生きることであろうと思います。

第三に、信仰が信仰者のありよう全体、乃至私という個の内面を指すものとすれば、実践とは、その信仰者の活動をさすのであり、それは究極的には大衆の魂のみとりの信仰達成であり、それに伴うさまざまな活動体である、というふうな規定できるのではないか、つまり実践といえれば実践の諸形態があるであらうけれども、しかしそれは信仰者の活動体、最終的には魂のみとりの信仰達成と考えたいのであります。

このように簡単に決めつけてしまうならば、現代に生きる法華信仰の実践とは、久遠本仏の法華経の救いに生きる信仰者の活動体であるという極めて抽象的な答をひき出すことになるのであります。私は宗教的にはこれでよいのではないかと考えますし、信仰実践というものを、ともかく大きな枠の中で考えるだけでこの場合においてはある意味では充分ではないかと考えるわけであります。むしろこのような基本の中で信仰を深めてゆくこと、それから社会的人間としての信仰者、社会的個としての実践者がそれぞれ信仰者の中で総合的に媒介され、或は葛藤に悩まされる

その中で信仰の営み、実践の営みが重要なのではないかというふうに考えるのであります。つまり、ここでは信仰と実践ということが基本的な問題として考えられなければならないのではないかと思うわけであります。

伝統教団から信仰教団へ刷新されることが、目下のわれわれの最大の課題であると思われます。この問題は教師一人一人の自己革新であり、檀信徒一人一人の信仰のめざめであり、そのような関係において、教師・檀信徒が一体の関係に連なり全ての信仰徒が共有の教団を持つことができなければいけないと思うのであります。その目標に向うことは、教団の組織化とか、或は教団の体制の刷新であるとかということだけに目をむけるのではなくして、実はすべての信仰者の信仰を深化すること、その活動体の実践を伴うものであり、その両用を併わせもつところの教団の建設というものが、いわゆる伝統教団から信仰教団への転換となると思うのであります。

このような抽象的な論議が問題ではないといわれるかもしれないが、現実には寺院における活動の中でどのような実践活動するかが問題であるといわれるかもしれないが、具体的なお答えすることはできませんが、次のようなことを思い起すのであります。

かの優陀那日輝和上が、当時の僧侶を誡めて、寺院住職というものは、とくとくとして旧来の活動をしているが、

現行は商家のオカミさんですら布教している時代である。一般大衆というものは、このような知的レベルに達して、それに対応してゆくような弘教をせよ、といわれている。

又、ある先師は、教学の確立がなければ、いくら多くの新寺建立を行っても、それはもろい存在でしかない、といつて教学の興隆を語っているのであります。

今日、教団において教学といえ、三秘五綱の解釈、或は教学の見解とか、教学的展開とかというふうな受けとられてはいるむぎがないでもありません。さきほど、教団・教学・布教の相互関係の緊密さということを示しましたのもそれらがいづれも信仰の地によって生かされなければならぬ、ないということに改めて申し上げておきたいと思ひます。一般に神仏を祈念して信仰する人、これを信心家、いわゆる困ったときの神だのみの信心が信仰家といわれているのであります。日本における信仰集団は、このような信心家達によって支えられているのかもしれない。

しかし、われわれが信仰の交流と教団の使命というテーマのもとにこのような主権をもつというのも、実はそこから脱却してよりよい教団を作り出す為にはどうしたらよいかという問題をかかえているからであると思ひます。

ここで、聖人の信仰を仰ぎみますと、教学というものが

単なる形式的論議でなかつたということは今更言うことではないが確認しておきたいと思ひます。

積尊の示された真実の教を追究して唱題事の信仰に帰着する、これが日蓮聖人の生涯において示された全体でありわれわれが、教学・教団・布教の問題として論ずるすべての問題であることは、いうまでもありません。

このような日蓮聖人の信仰は、日本国に生れた一人の人間として、或は末法に生を営む一人の凡夫としてのそれに始るのであり、そして、法華經の行者、上行菩薩のご自覺に立たれていることは勿論であります。しかし法華取要抄に示されている通り、末代の凡夫としての共感に立たれているということに注意しなければいけないと思ひます。

信仰というものは、上から下へ与えられるものであつてはならない。常に一衆の一人として、或は、一個の有情として自己の生を確認するものでなければならぬのではない。いか、しかも、われわれは大衆の一人として生活しているわけでありませぬ。しかし、教化・実践の場において、大衆の一人であるという認識を、はたして感得しているであらうか、信仰の地に立つということは、実は自己を大衆の一人として置く、或は大衆の悩みを共に悩むのでなければならぬと思ひます。そこに日蓮聖人の信仰の意義を考えてゆかなければならないと思ひます。

マックス・ウェーバーの社会科学の方法という中で述べ

ている。「民衆の生活の隅々にまで入り込んで彼らの魂の平安のために、さまざまの矛盾を納得的に説明し、了解させるという役割を担っている」。という精神は、大衆の一人として生き、そこからの問題提起であるというふうに考えたのであります。

然らば、信仰者の実践というものを、聖人はどのように示されたのでありましょうか、これも改めて主旨を申すまでのことはありませんけれども、聖人の法華信仰の理想像は法華經の行者であるということである。

日妙聖人御書にみられるように、余人に対しても篤き信仰者を法華經の行者として讃めたたえているのであります。つまり、法華經の行者は、聖人とどまるものでなく、聖人の法華信仰の理想像であるということを変更して確認しておきたいのであります。法華經の行者とは凡夫を離れた存在ではなく、凡夫の自覚の上に本仏釈尊の大慈悲と証悟というものを確認することであるということであります。すなわち、確証というものは、法華取要抄の中に示されたように、われら凡夫の上に加被された釈尊の大慈悲と法華經の教法を受け取ることである。そしてまた、觀心本尊抄の法華を識る者は世法を得べきか。一念三千を知らざる者には仏大慈悲を起し、妙法五字の袋のうちこの珠をつつみ、末代幼稚の頸にかけさしむ、四大菩薩この人を守護し給はんこと、太公周公の成王を摂扶し、四皓が恵帝に侍

奉せしに異らざるものなり、の文こそ、最も大切なわれわれの信仰の指標、信仰者の境地が示されると思うのであります。この文を依拠として、ことを再認識し、その内容の深化、その境地の実成・伝達というものにおいて信仰生活を営み、伝達・実践というものをなさなければいけないと考えるわけであります。

しかし、このような聖人のお言葉は、単に自己において証せられているといった問題ではない。さきにあげた觀心本尊抄の文に、天晴れぬれば地明らかなり、法華を識る者は世法を得べきか、というふうに、世法と仏法の相即を説いておるところであります。富木殿にあてられた手紙にもみられるように信仰というものが単に心の内容だけの問題ではないと述べられているのでありまして、社会的な個としての信仰者の自覚というものが述べられているということに注目しなければいけないと思っております。

このような、信仰の内証と、国土の救済というものは、立正安国論において、汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ、然らば即ち三界はみな仏国なり、仏国それ衰えんや、十方は悉く宝土なり、宝土何ぞ壊れんや国に衰微なく土に破壊なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん云云、というところに一体的に示されていると思っております。

聖人は、娑婆国土を釈尊の浄土とされ、その中の衆生は

すべて是れ我が有なりということを確認されているわけ
ありますが、この理想の浄土の顕現というものが法華經の
浄土にたてられ、一方では本仏釈尊の大慈悲、或は本仏の
成道時の加被というもの、その中にわれわれが救済され
と共にわれわれが生き続けている、そこにわれわれの信仰
と実践の第一義諦があるのではないか、と考えるのであり
ます。

具体的な行動、組織論、教化論などいろいろあるでしょ
うし、又、行っていかなければいけないと思いますが、し
かし、今、申したような釈尊よりの救済と救済に生きる人
間の実践というものが大衆レベルにおいて確認されなけれ
ばならないのではないか。

そのような意味において、教団と教学と布教が一体化さ
れなければならぬ。単に一边に一体化するわけにはゆか
ないであらうし、又、お互いが緊張関係に成立つものであ
らうと思うのであります。

しかも、繰り返しになるかもしれませんが、現在におい
て理想的な法華經の行者、或は英雄の存在があつて、それ
に後ついてゆくというようなことは考えられないし、教団
というものは、そのような形ではよくならないのではない
か、つまり、教団のリーダーと、教学と布教者というもの
が信仰と実践の中において信仰教団というものができ上
るのではないか、私はこのように考えたわけでありませ

抽象的なことでお叱りを受けるかもしれませんが、一応
確認事項だけ申し上げさせて戴きました。

農村寺院における教化の問題点

(討議要旨)

昭和四十五年五月二十三日・四日・五日の三日間、秋田
市において東北六県宗務区教化研究集會が開催され、その
報告にもとづいた質疑応答と討議が行われた。

東北農村の現状は、就勞適齡者の都市流入による過疎化
現象の深刻な社会問題と共に、都市化の波も除々にはあ
るが、たしかに生活の中、意識の中に打ち寄せている事実
も見逃すことはできない。

こうした変容の中で、農村寺院は教化法をどのように考
え、どう実践してゆくか、現場教師はとまどいを感じ、試
行錯誤をくり返し模索しているのが偽わざる現況である。

一般に、農村における檀信徒の教師への指導を期待する
ものは、実際の生活に直接に関わるもの、実生活の指示を
望んでいる。本来の法華經と日蓮聖人の教えをそこにどう
指導し信仰を高めてゆくか、そのかみ合わせの難しさは、
また、言説布教の当面する困難な課題でもある。この問題
について、体験者から布教が実状にそぐわないものになっ